

高橋和巳全集

第七卷

吉川幸次郎
埴谷雄高

河出書房新社

高橋和巳全集 第七卷

小説7 ©1977

一九七七年 十月十日 初版印刷
一九七七年 十月十五日 初版発行

著 者 高 橋 和 巳

発 行 者 佐 藤 皓 三

発 行 所 河 出 書 房 新 社

東京都新宿区住吉町九五
電話 〇三―三五五―五三二一
振替東京〇―一〇八〇二

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

邪宗門（上）

解題・補記

45¹

3

第七卷
小説
7

邪宗門
(上)

序章

その一 何処より

1

最初、砂礫敷きの細ながいプラットホームがなんの飾りもなくのびる駅に降り立ったとき、鮮明な雲の輝きが、少年の胸を撃った。胸に、白い布でつつんだ遺骨壺をつりさげていたからだろうか、その見知らぬ駅とその町とが、あたかも故郷であるかのように少年には思われた。ほんのわずかの間、不義理をしていて忘れ去っていたもの、帰って来さえすれば無条件に受けいれてくれる、あの、人々のいう古里であるかのように――。

雨あがりの透明な空気の中で、その時すべての風物が鮮明な輪郭をとりもどしていた。盆地をとりまく丘陵は、落葉して灰色の毛氈のように見えるくぬぎの木を混じえながら、全体としては紫いろに天辺を区切っている。天頂では白い雲は、山際に寄るにつれて、夕陽に染まり、雲の裾は羞じらうように山にしなだれかかっている。

列車から吐きだされた学生や通勤客が、車内の誰彼に手を挙げて挨拶しながら、足ばやに跨渡橋を渡って

改札口のほうに消えていった。ざわめきが消えたあとに、轎をもって、入營する兵士を見送りにきた一団と、その少年だけが残り、やがて列車は鋭い汽笛とともに始動した。見送りの一団は、狭い山のはざまに消えてゆく列車に向って万歳を三唱し、そして一様に虚脱したように肩の力をぬき、駅舎のほうに会釈しておいて、蒼く光る軌道沿いに歩み去った。少年は、すべての人影が消え、沈黙がプラットホームにかえってくるのを待っていた。いや計画的に待っていたのではなく、偶然仰ぎみた空が、雨に浄化されて広がっている、その美しさに惹かれ、容易に視線をそらすことができなかったかもしれない。

しばらくして、少年は、木造りの駅舎の中央に掛けられた駅名表示板を確かめるように見た。

構内のはずれに停車している無蓋貨車には木材がうずたかく積みあげられ、黒い機関車給水塔が孤独そうな影をおとしている。少年は何かを確かめるように、ぐるりと周囲に視線をめぐらせる。駅の裏側はコンクリートで地固めされた高台になっていて、その高台に竹藪がしげり、肌寒い風にざわざわと揺れていた。

プラットホームの先端で、タブレットを機関助手からうけとった駅の助役が、駅のはずれにあるシグナルをたしかめて駅舎にもどろうとして、プラットホームに一人のこっている少年の姿を見とがめた。長年の鉄道勤務の直観で、その少年が切符をもっていないのではないかと疑ったからだった。

この町の近代産業は紡績工業だけだが、時折り、ホームシックにかかった女工が、無断で寮をぬけだしてこの駅の構内をさまようことがあった。少女たちは、たとえお金は持っていないでも切符は買わず、裏手から忍びこんで不安げにあたりを見まわす。そして警官であれ駅員であれ、制服を着た者にたいしては奇妙に怯えた反応をする。いま、呆然と駅頭にたたずんでいるのは少女ではなく少年であり、この土地から逃がれようとするのではなく、ここへやって来たのだが、その姿に漂う孤独そうな気配は共通していた。貧しい山村の子弟が酒造店や和紙工場に丁稚奉公にきたにしても、その服装は貧相にすぎた。第一、胸に遺骨壺をつりさげているだけで、柳行李ひとつ持っていない。朝夕はすでに激しく冷えこむ季節なのに、くたびれた霜ふりの中学生服を着ており、足は草鞋^{わらじ}ばきだった。

「どうしたんだね」助役は近より、黒い帽子の廂にかくされた少年の瞳をのぞきこんで言った。近よつてみると少年は無残に痩せており、年齢にはふさわしくない皺が額に刻まれていた。皮膚全体が黄疸を病むように黄ばんで汚れている。

「どこか体の調子がわるいのかね」

少年の長い睫毛が悲しげにしばたたくのを見て、助役は少年を詰問しようとする気持を失った。

「ここは神部ですね」胸のポケットから紙きれを取りだし、さっき確かめたはずの表示板にある駅名を少年は言った。

「そうだよ」助役は言った。

「このまちにお城はありますか」

「ああ、城址ならあるよ。ここからも見える。あのミシンの広告と、小さな明りとり屋根がついている養蚕場のあいだに、こんもりした森が見えるだろう。もっとも城址というより、新興宗教の本部のあったところだね」

少年は食いつくように、そのほうを見た。数カ月前までは、その城址には、ある新興宗教の本殿があり、ブラットホームからも、その神殿が望めたのだが、いまは破壊されて、公孫樹いちじくの老木が黄色いしみのように見えるにすぎない。

「そこへ行くのかね」

「水を飲ませてください」少年は全く別なことを言った。

助役は自分にも説明できない微妙な心の動きから、きつとどこから無賃乗車してきたにちがいないその少年を見のがしてやろうと思った。病気が栄養失調か、生気をうしなった顔に、そこだけが少年らしい敏捷さで動く黒い瞳と長い睫毛が、彼の心を和らげたのだろうか。それとも、風に揺れるたびにコトコト音をたてている胸の遺骨壺のせいだろうか。助役は厳格で、そして彼自身その性質を誇りに思っていた。ある貴族

院議員がこの町を訪れたとき、出迎えの名士たちが入場券を買わずにプラットホームに入ろうとした時も、彼は憤然としてそれを阻止した。だが今、助役はいいたせば少年が切符をもっていないだろうことが解っているながら、タブレットを肩に掛けて、線路沿いに駅舎のほうへ歩いていった。

「そんな恰好でいつまでも突っ立っていると風邪をひくよ」途中、助役はふりかえって声をかけた。「寒いんなら、茶は駅舎へくればあるからな」

改札係もすでに柵をとざして駅舎にもどっており、人影は下り列車をまつ待合室の数人をのぞいては、便所わきの出札所の柵にまたがって近所の子供たちが遊んでいるだけだった。助役が駅舎にもどり、窓ガラスごしにプラットホームを振りかえった時、少年は線路におり、機関車給水塔のわきにある裸の蛇口に口をつけて水を飲んでいた。

「なんですか、あの子は」改札係の若い駅員が助役のそばに寄ってきて言った。

「気分が悪くなつて途中下車したんだろう」と助役は言った。今日のわしはどうかしてるな、と助役は思った。縁もゆかりもない貧相な少年のため、自慢の規律を破っただけでなく、かえって少年をかばおうとしている。

「そうですか」改札係は部屋の中央の柱にかかっている大時計と自分の腕時計をちらっと照し合わせた。

その時、鉄道電話のベルが鳴った。助役はその電話を受け、下り列車の遅れる旨を黒板にしるし、改札係に待合室へ知らせにやらせた。そして今度、窓ごしにプラットホームのほうをすかし見た時、給水塔の所には少年の姿はなく、プラットホームの屋根の長い影が、無人の構内に薄くおちているだけだった。

周辺の自然の美しさにも似ず、街並みには荒廃と疲労の色が濃かった。家々の戸も立看板も下半分が泥をあげたように汚れている。駅前のメインストリートにすらほとんど人影がなかった。

この町は元来、絹織物の産地として知られ、木材をはじめこの地方の物産の集散地として発展した。町に

は商人宿も多く、人口に比して不自然に繁華な色町ももっていた。またこの町に本拠を置く新興宗教の信徒の参詣も、かつてはこの町の商店街を賑わすのに役立った。だが、度重なる不幸な事件のために、いま少年の目に映る街並みは、まったく活気がなく、商店の多くは、日暮れ前にすでに雨戸を閉ざしはじめていた。

不幸の第一は昨年、つまり昭和五年の全国的な豊作飢饉だった。この町は明治維新以後も久しく自給自足体制の中に眠っていたが、鉄道が開通してிரை、桑の木が育つ風土を利用して絹糸工場が設置され、また蔬菜類を二時間あまりで京都、大阪にとどけられる地理的条件が幸いして、それが農家の貴重な現金収入の源ともなった。山陽から山陰へと往来する商人たちが多く立ちより、地元の農家にも養蚕や蔬菜の現金収入があれば商店にもぎわう。一昨年の大恐慌には、農家の出稼ぎや日雇いの道は閉ざされながらも、元来、近代工場の少いこの町は、それほど直接的な打撃はうけなかった。だが、昨年、米の収穫高の予想が、過去五カ年の平均の一割を上まわる豊作だと発表されたのをきっかけに、米価が大暴落をはじめ、石^いあたりの生産費が二十七円余でありながら、発表の三日後にはたちまちに生産費の半額にまで下落した。そして同時に、春^{はる}繭は四十七パーセントの暴落、さらに蔬菜類も、「キャベツ五十個が敷島一つ」という値下りとなった。不景気にはかえって繁昌する花柳界もさすがに灯の消えたようになり、失業して帰省した働き手を無為にかえこんで近郊の農村はよんどように動かなくなった。

「またひとり乞食が帰ってきた」

どこで盗んだのか、泥まみれの生大根を嚙りながら歩く少年の姿を見ても、人々はさほど特別な反応をしめさなかった。

「ちえっ、縁起でもない」夢遊病者のように店先に立ちどまった少年を見て、果物屋の店主はやけにはたきをかけながら舌うちした。「たまに店をのぞくから誰かと思ったら、乞食や」

「でもまあ、門前町の神具店よりはましさ」乳飲児をあやしながら女房が言った。「門前町は、救霊会あつての門前町だからね。教主さんはどんな偉い人かは知らんけれど、女をたぶらかしたり、お国に背くような

ことを言ったりしておとりつぶしになつては、もうおしまいだよ」

「悪いことは重なりやがるからな。今にこの町は、乞食だらけになるよ」と店主が言った。

少年は果物屋の前で、買手もつかぬまま埃をかぶつた栗やりんごや柿の山を見ながら、ふいに涙をながした。店番に退屈していた店主が、そばにいた番犬を少年にけしかけた。けしかけられた犬ははげしく吠えながら少年に襲いかかつていった。少年は逃げる力もないように棒立ちの姿勢のまま、店さきの果物を見ている。

「ケン！ かまへん、噛んでやれ！」と店主は言った。

少年が、町の中央部を横断して流れる川のほとりまでたどりついた時、日没の早い山間の町には、うすい霧が立ちこめはじめていた。川は碧色の水をたたえて無表情にながれている。橋のたもとの水位をしめす杭は流れの方向にかたむき、堤に土囊を積みあげたままの決潰のあとがあつた。いまは穏やかに流れるこの川が、実はこの町の人々に第二の厄災をもたらした。昔、この盆地の高台に城を築いた封建領主は、敵の攻撃をうけた際には、この川の堤を破れば、難攻不落の浮城になることを計算して築城したといわれているが、そのエゴイスチックな計算が、現代の豊作飢饉の最中に現実となり、この盆地のすべてを水びたしにしたのだ。農民は泥まみれの家をはなれて、失業地獄の都市へと逆流し、町の中心部の商店街もばたばたと店を閉ざした。この地方の特産品である和紙も絹織物も寒天も、水びたしになつては一文の値打ちもないからだった。

少年は橋を渡ると、もういちど紙切れをだして地図をたしかめ、道をそれて川堤沿いに歩きはじめた。先刻、果物屋の店主がけしかけた犬が、なぜか従順にそのあとについて行く。やがて町はずれの岡に、高く築かれた古い石垣のあとが見えた。少年が母から聞いた話では、その岡の上に荘厳な神殿が輝いているはずだったが、その姿はなく、いまは石垣の下のように、信徒の宿泊施設らしい質素な建物が、街道はずれのさびれた旅館のように、樹々につつまれて建っているだけだった。

少年は歩みをとめ、雨装束で釣人が水面に糸をたれているのをぼんやりと眺め、またわれにかえって歩きだした。ゆっくりと喘ぐように少年は歩いてゆく。町の家々に灯がともり、空がはげしく変色し、そして山の頂きから中空に扇のように広がった日脚が薄れるころ、彼は露草のしげった川辺がまるで懐かしい寢床であるかのように、足を折り、ゆっくりと身をよこたえた。倒れる瞬間、まだ跡をつけてきていた犬にむかつて少年はほほ笑みかけ、そしてそのまま彼は動かなかった。

2

もしその時、その老婆が通りかからなければ、いやたとえ通りかかっても老婆に背負われた少女が発見しなければ、その少年の命はそこで終り、一つの苦悩は蕾のままにその川堤で朽ちはてていたはずだった。老婆は足の悪い少女を背負って、学校の送り迎えをしていた。少女は幼いころに小児麻痺を病み、後遺症のこって跛^{びこ}だった。すこしの距離ならまったく歩けないわけではなかったのだが、事情があつて、この町にある小学校に通うことができず、わざわざ隣の町の小学校に通い、老婆が付きそい役をつとめていた。老婆には息子もあり孫もあったのだが、少女の幼いころから子守役をつとめ、少女が小児麻痺を病んでからは、二六時中、世話をやいていた。今では情が移って、本当の孫よりもかわいがっているくらいだった。老婆はこの教主の次女の性質の柔和さが憐れでならなかったのだ。なぜなら、教団はかならずしも呪術的な病氣なおしを売りものにはしていなかったのだが、開祖や教主の靈力に救われ、現に不治の病が癒えたという信徒も数多くいた。だから当の教主の家族の中に一目で不具と知れる者のいることはやはり好ましくなく、教団が弾圧にあう前から、長女の阿礼が華やいだ雰囲気の中で甘やかされている時も、次女の阿貴はほとんど家の外には出さずに育てられた。やがて老婆のほうから願いでて彼女の家にひきとることとなった。老婆には別に役職はないが、創業のころからの教徒として信頼されていたからである。戸籍上もいまは老婆の孫娘の民江の妹ということになっている。教主の長女の阿礼は地元の女学校に通っていて成績がずば抜けてよく、

天性の気品で町の評判だったが、次女の阿貴はこつそりと老婆にともなわれて隣の町の小学校に通っていた。汽車に間に合えば汽車で通ったが、いそぐ必要のない帰りには、老婆が少女を背負って川沿いに帰ってくる習慣になっていた。

だが、何が幸せになるかわからない。

教団は今年の春、大弾圧をうけ、二代目の教主行徳仁二郎をはじめ、幹部、地区司祭ら九名が検挙された。全国に百万の信徒を誇り、地元の政治にも隠然たる発言権をもっていた教団は、一朝にして、淫祠邪教の汚名をうけ、教主は公判のはじまる以前から新聞雑誌に不敬の叛徒と罵られた。その時、次女の阿貴は、叛徒首魁の娘としての直接的な迫害からはともかく免れたのである。逆に、これまで教主にたいする信徒の崇拜に、その愛らしさと気品で色をそえていた長女の阿礼は、地元の女学校でことごとく厭がらせをされる身となった。かつて頭のいい阿礼に講義の誤りを指摘されて恥をかかれた教諭、その自由すぎる振舞いに眉をひそめながらも教団の権威をはばかって陰口をきくにすぎなかった女教諭らは、ことあるごとに阿礼を非国民と罵った。美しいものは、愛されやすく、また迫害されやすい。町の悪童たちも、いまは公然と阿礼をからかうことができた。気性の烈しい阿礼はしばらく短刀を懐に秘めて女学校に通っていたが、父を侮辱した教諭を物差しで殴打して、そのころすでに退学させられていた。

「お婆ちゃん」と阿貴が背中から老婆に声をかけた。

「阿貴さんは、疲れたかや」と老婆は言った。だが実際に、疲れていていたのは老婆のほうだった。阿貴を背負った兵児帯が交叉する胸のあたりは、汗でぐっしり濡れていた。

「あそこの草むらに誰か人が倒れてるよ」と少女が言った。

「どうせ町のわるさ坊主でしょ。さあ、早う帰りましょ」

この盆地特有の濃い霧があたり一面をおおっていた。霧は碧色の川の水面から湧きあがるように見え、また町の周囲をとりまく山の上から流れおりてくるようにもみえる。気流はこの盆地のなかに溜ってよどみ、